



今月の先生

岐阜市民病院

高橋 健氏

血液内科部長兼輸血部長  
兼地域連携部長

昭和 57 年金沢大学医学部卒。専門分野は造血器腫瘍化学療法。日本血液学会認定血液専門医・指導医、日本内科学会認定内科医。

# 働くあなたのクリニック



血液内科と  
かかりつけ医の話

患者さんはどんなきっかけで血液内科を受診されますか？

皆さんが診察を受けられるときは、お腹が痛いならば消化器内科、左胸のあたりが痛いならば循環器内科というように、受診する診療科を考えると思いますが。これに対して、血液内科は、一般の方にはやや捉えにくい診療科かも知れません。

「今日はちよつとおかしいから血液内科に受診しよう」

と自分で判断して受診される患者さんはまずおられません。多くは、かかりつけの先生や、病院の他の診療科からの紹介で受診されます。

血液の成分と働きは？

血液には、白血球、赤血球、血小板という3種類の血球があります。白血球（好中球、リンパ球など）は細菌やウイルスなどの感染から体を守ります。赤血球は体中に必要な酸素を運び、

血液疾患は予防できますか？

白血病の患者さんから、「私がムリをしたのが良くなかったのですか？食事に問題があったのですか？」と質問を受けることがあります。これに対しては、「過度のムリや偏食との関連は完全には否定できませんが、一般的には関連ない」とご説明しています。

糖尿病や心疾患は生活習慣が密着に関連する生活習慣病です。がんの中でもタバコの関連が高い肺がんは生活習慣病といえます。しかし、若年女性の鉄欠乏性貧血などを除いて、多くの血液疾患は生活習慣病ではありません。白血病や悪性リンパ腫は一定の確率で偶然発症する病気と考えられます。予防することは困難です。

かかりつけ医の役割は？

重要なことは適切に診断と治療を受けることです。この点で、かかりつ

不必要となった二酸化炭素を回収する役割をします。血小板は出血した場所に集まって止血の働きをします。これら血球は血漿という黄色い液の中に浮いて血管を流れています。血漿の中には血を固める凝固因子というタンパクが含まれており、出血が起きた時、凝固因子が血小板と協力してしっかりと血を止めます。

血液内科が担当する病気は？

血液内科は、これらに異常が出た病気を担当します。例えば、血液のがんといわれる白血病などの白血球が増える病気、貧血などの赤血球が減る病気、血小板減少症などの出血しやすくなる病気、凝固因子が欠乏し出血が起きやすくなる病気などです。

リンパ球は血管の外にもリンパ節として免疫のネットワークを作っていますが、このリンパ節の悪性腫瘍である悪性リンパ腫も担当します。

け医の役割が大きいと思います。白血病はカゼ症状で発症する場合もあります。かかりつけの先生が、まず通常のカゼの治療を行い、改善がない時は血液検査をし、異常を見つけて血液内科に紹介されます。

患者さんが治療方針で迷った時には、別の専門医にセカンドオピニオンを受けることも勧めますが、かかりつけ医にご相談することも勧めます。かかりつけ医からは、専門医と患者・家族の中間の位置からのコメントを受けられます。

普段は健康な方でも時にカゼを引いたり、下痢をしたりすることがあります。その時にかかりつけ医の治療を受けることは、語弊がある言い方もしませんが、ある意味、防災訓練といえます。これを繰り返して相談しやすいつながりができていけば、すわ大災害の時、もし白血病になった時、かかりつけの先生は、円滑にご自分が最適と考える病院をご紹介します。そこから血液内科の仕事がはじまります。